

## 小論文

## ◆文(日本語・日本語) 学部◆

(九〇分)

## 第一問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

チャレンジという言葉は威勢が良い。深刺(ちんさ)として、向上心に満ちている。チャレンジをするかどうか、それが精神的な若さの指標となりそうにすら思えてくる。だが同時に、空疎な掛け声のように響いてしまうこともある。おざなりに発せられるフアイト! とか、ガッツ! のように。

どんな意味を「チャレンジ」から思い起こすか、人それぞれでaピミョウに違いがあるように思われる。そこで、とりあえず三つの要素の配分で違いが出てくるのではないかと考えてみたい。すなわち、

①(ハングリー精神) (発奮) (青雲の志) といった、野心的で力強い心構え。ただし墮落すると、なりふり構わぬ功利主義に陥りかねない。

②(自己表現) (内面の) 成長 (夢) といった、生きる意味そのものと密接に関わってくるようなスピリチュアルなニ

ュアンス。ただし墮落すると、ファッションとしての自分探しに陥りかねない。

③(行動力) (積極性) (勇氣) といった、意欲的で前向きな姿勢。ただし墮落すると、就活の面接で自己アピールに多用される「チャレンジ精神」と同じような形骸化に陥りかねない。

現代においては、①の要素が希薄になりつつあるように感じられる。もはやそれは「立身出世」とか「故郷に錦を飾る」「末は博士か大臣か」といった表現が心を躍らせた時代のものであり、昨今の草食的(そうじき)というかソフイステイク(soft take)された世の中にはいささか無粋に感じられる。

では②はどうだろう。チャレンジの結果よりも、チャレンジすること自体が大切だといった文脈においては俄然(がぜん)重みを持つてくる要素である。けれども、引きこもりやニート、さらには「新型うつ病」などの現代に特有な若者の精神病理もまた、この要素を「こじらせた」挙げ句のものであろう。うまくチャレンジに踏み切れなかつた若者の落とし所としての引きこもり・ニート・新型うつ病、といった理解も可能ではあるまいか。

おかしな言い回しかもしれないが、ライト感覚で口から発せられる「チャレンジ」が、まさに③である。やる気に満ちた清々(すがすが)しい精神は、必ずやチャレンジといった分かりやすい形で発露(はつろ)されるはずである——そんなもサツカクを大人たちにおぼえさせてしまいかねない点で、むしろ厄介かもしれない。

おそらく昭和の時代では、①がメインでそこから③が派生する形で「チャレンジ」は理解されていただろう。②は文学青年の寝言に近いと捉えられていたのではないか。そのような時代を嫌悪する人もいれば、ひたすら懐かしむ人もいる。

いまだきの若者は、チャレンジなんて面倒なことをせずに、さして欲もなく(スピードの出る自動車を欲しがったり、広い家や豪華な暮らしに憧れたりせずに)、等身大のささやかな人生で事足りているのだろうか。がつつせずに、つま

らぬ自尊心や自己顕示欲に惑わされることなく、個性を重んじた小綺麗な生活を淡々と営んでいるだけなのだろうか。これ見よがしにチャレンジ精神を高々と掲げたりはせず、ひっそりと自分なりにチャレンジを試み、そしていつしか驚くほどの高みに達しているくせに当人はそれを誇示することもない——そんなケースを見聞きすることが少なくない。たとえば自分が気に入った靴がないからとそれを自分で作ることにし、職人として弟子入りして腕を磨き、さらにはイタリアにまで行って修業し、でもそうした経歴をわざわざ披露することもなくひっそりと小さな靴屋を開いて素晴らしいオーダーメイドの靴をこつこつ作っているとか、まあそういった類の在りようである。本人は無頓着で、自画自賛しようとするはいくらでもできるのに、さりげなく振る舞っている。わたしとしては、正直なところ、カッコいいなとちよつと感動する。

スポーツにしても、以前に比べれば「悲壮感」がなくなっている。国の名誉を背負ってとか、負けたら死んでお詫びするしかない、なんて馬鹿げた気合いの入り方ではない。それでいて結果は立派な記録を残したりするではないか。そのようなAある種の気負わぬカジュアルさが、成熟社会の証ではないかと思ったりする。もしかするとチャレンジという言葉自体が、もはや古くさくなりつつあるのではないか。

冒頭で挙げたチャレンジを巡る三要素のうち②、すなわち(自己表現) (内面の) 成長 (夢) といった、生きる意味そのものと密接に関わってくるようなスピリチュアルなニュアンスすらも、そこに価値を置きつつも自嘲するだけのクールさを若い世代は身に看けつつあるような気がしてならない(そのような突出した部分は、意外にも、お笑いの世界において鋭敏に表出しているように感じられる)。

以前だったら世間の共通認識として「チャレンジこそ善」といった空気があったように思われる。右肩上がりがあり、といったノリと同じ価値観である。でも現在では、放っておいてもごく自然体(じぜんたい)にチャレンジをしていくタイプがあり、

いっぽうチャレンジという言葉を自分と関連づけて理解することすらできないタイプの両極端に分極しつつあるのではないか。後者は、「あれこれ気にくわれないことは多いけれど、かつたるいから現状EJ(いいや)というわけで、それをこつこつ答められたりはしないだろうけれど(それもまた成熟社会ゆえである)、やがて慢性的な不安全感となつて心を荒(あ)ませていく。

チャレンジすることの意味が分からない、チャレンジの概念が事実上欠落している子どもが珍しくない。過保護ですべてを親が先取りして「やってあげて」しまう家庭に育つた場合や、逆にネグレクトに近い扱いを受けると、そのような子どもになりやすいのかもしれない。心の中に空虚感や無力感を抱え込んでしまうのだから。そうすると、そのような子どもにチャレンジの喜びや充実感(今さらながら) 教え込むことは途方もなく困難に違いない。だが、それは断固必要だ

ろう。

○現状に違和感があるから。

○ヒマだから。

○せいぜいそんなところなのだ。敷衍(ふせん)すれば、モチベーションだの動機だのに特別なものなど存在しなくなっていくのが成熟社会という形態なのかもしれない。

しかし、あえてチャレンジという大仰な言葉が必要になるような子どもは、やってこらんと促したり励ます程度では腰すら上げようとしない。チャレンジの重要性を感じ取ってもらうのは、生きる意味とか人生の価値をリアルに説き聞

かせるくらいに至難の業だろう。  
わたしは精神科医として長年勤務しているが、引きこもりや適応障害、新型うつ病、パーソナリティー障害といった若者を相手にすることが珍しくない。彼らは最初からチャレンジと無縁か、さもなければチャレンジを前にフリーズしてしまっただけの人たちである。そのような患者は増えつつある。チャレンジなんかしなくとも生きていける世の中のはずが、やはりそれではうまく生きていけないのである。一見したところはチャレンジなんか不要に見えても、自然体でさらりとチャレンジのできる精神の持ち主でなければ生きていけない世界、それが「チャレンジ不要の時代」に照応した世界なのである。

(春日武彦「チャレンジ不要の時代」に生きる子どもたち」による。本文を一部改めた。)

注

ソフィステイケートされた — sophisticate 洗練された

問一 傍線部 a~d のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 筆者は傍線部 A「ある種の気負わぬカジュアルさが、成熟社会の証ではないか」と述べているが、成熟社会におけるチャレンジ精神のあり方を筆者はどのように考えているのか、その考えについてまとめた箇所を、これ以降の文章から、三十一文字でそのまま抜き出して書きなさい。

問三 本文全体の内容を、二百字以内で要約しなさい。なお、句読点も字数に含むものとする。

問四 本文を読み、筆者の考えについて、あなた自身の考えたことを五百字以内で述べなさい。その際、あなたの経験を交えて記しなさい。なお、句読点も字数に含むものとする。

また、その作成した文章に適切な題名を考えて、記しなさい。

### 小論文

▲文 (日本語・日本語) 学部 ▼

解答 ▲現代の若者にとつての「チャレンジ」▼

問一 a、微妙 b、錯覚 c、維持 d、攻略

問二 モチベーションだの動機だのに特別なものなど存在しなくなっていく

問三 チャレンジという言葉には、①野心的な意味、から、②生きる意味そのものに開くスビリチュアルなもの、③意欲的な姿勢、と多様な意味がある。いまだきの若者はさりげなくチャレンジしつつも立派な結果を出し、かつスビリチュアルなものには価値を置きつつ距離を取るクールさがある。しかし現在、自然体でチャレンジしていくタイプと、チャレンジを自分と関連づけて理解することすらできないタイプの両極端に分極しているようだ。(二百字以内)

問四 (解答例)題名「チャレンジ」はなくならない  
筆者の言う「前向きな姿勢」を「チャレンジ」に含めてしまえば、現代社会で「チャレンジ不要」になることはな

いと思ふ。  
高校で私の所属するバレーボール部は弱かった。勝ちたくなかったわけではないし、試合前には自主的に集まって練習もしたが、勝利に向けて「チャレンジ」していく積極的姿勢にはほど遠かった。しかし、それでも仲間と声を掛

け合うような積極性は必要だし、そもそもバレーボールをやるという気持ちには必要だ。

今は昔のように、同じ地域の固定した人間関係の中で、先祖代々決められた仕事をして生きていくことができる人は、まずいない。仕事は自分で選ばなくてはならないし、常に新しい人間関係の中で仕事や生活をしていかなければならない。ただ生きていく、というだけでも「前向きな姿勢」は常に求められる。

確かに、昭和のころのように「青雲の志」で「チャレンジ」する時代ではないだろう。しかし、「チャレンジ不要」と捉えるのは無理だ。最低限の「前向きな姿勢」は必要なのだと思ふことで、生きるための最低限の「チャレンジ」をどうすれば誰もができるようにするかをみんなで考えることが大切だ。(五百字以内)

解答

問一 A-I E-I-A  
問二 B-I-A C-I-I D-I-E

問三 A  
問四 I

1

チャレンジという言葉は威勢が良いのと同時に空疎な掛け声のように響くことがある。以前なら世間の共通認識として「チャレンジこそ善」という空気があったように思われる。しかし現在は、モチベーションや動機などは存在せず自然体にチャレンジをする。チャレンジが不要に見えても、マラリとチャレンジのできる精神の持ち主でなければ生きにくい世界、「チャレンジ不要の時代」に照応した世界である。

2

チャレンジという言葉は空疎な掛け声のように響くことがあると同時に威勢が良い。自然体にチャレンジしている子供にはモチベーションや動機などは存在しない。過保護の家で育つ子供やネグレクトに近い扱いを受けたり子供はチャレンジする意味が分からない場合、成長を教えることは難しいが必要だ。チャレンジせずとも生きていける世の中であまり生きやすいはず、現代に若者特有な精神病をもつ若者を相手にすることも多い。自然体でマラリとチャレンジのできる精神の持ち主でなければ生きにくい世界、「チャレンジ不要の時代」に照応した世界である。

3

チャレンジの意味は①野心的で力強い心構え②生きる意味と密接に関わるようなスピリチュアルなニュアンス③意欲的で前向きな姿勢である。いまどきの若者はチャレンジ精神を高々と掲げず、いっしょに驚くばかりの試み、誇示しない。クールさを身につけてつづつある。現在は放っておいても自然体にチャレンジするタイプとチャレンジという営為を自分と関連づけて理解できないタイプに分極している。(200字)

4

チャレンジは①野心的で力強い心構え、②生きる意味そのものと密接に関わるようなスピリチュアルなニュアンス③意欲的で前向きな姿勢の意味がある。いまどきの若者はいっしょに驚くばかりの結果を出すか当人はそれを誇示しない。クールさを身につけてつづつある。現在は放っておいても自然体にチャレンジしていくタイプとチャレンジと自分と関連づけて理解できないタイプに分極しているようだ。(198字)

5

チャレンジは①野心的で力強い心構え、②生きる意味と密接に関わるようなスピリチュアルなニュアンス、③意欲的で前向きな姿勢の意味がある。いまどきの若者はいっしょに自分なりにチャレンジを試みるタイプとチャレンジと自分を関連づけて理解できないタイプに分極しているようだ。現在は前者のような精神の持ち主でなければ生きにくい世界であるため、後者のような若者はうまく生きていけないのである。(188字)

6

以前なら世間の共通認識として「チャレンジこそ善」という空気があったが、

チャレンジには①野心的で力強い心構え②生きる意味と密接に関わるようなスピリチュアルなニュアンス③意欲的で前向きな姿勢の意味がある。いまどきの若者は自然にチャレンジを試みるタイプとチャレンジを自分と関連づけて理解できないタイプに分極している。現在は前者のような精神の持ち主でなければ生きにくい世界であるため、その世界でうまく生きていけない後者のような若者にチャレンジの喜びや充実感を教える必要がある。(201字)

